和朝
今昔物語
巻之五
十四

今昔物語 倭部 十四目録

○怪異傳

一 鬼現油瓶形殺人語
二 近江國女生霊来京害人語
三 河原院化物殺女語
四 鬼現板殺人語
五 近江國鯉與鰐戰語
六 常澄安永於不破關夢妻語
七 紀遠助値女霊被殺語
八 亡妻霊値舊夫語

九　亡夫来値妻語
十　鎮西人至度羅鳴語
十一　播磨國鬼来人家被射語
十二　近江國栗本郡大祚語
十三　白井君銀提入井被取語
十四　近衛舎人於常陸國依歌失命語
十五　於京極殿有詠古歌音語
十六　雅通中將家在同形乳母二人語
十七　散米退鬼語
十八　堀河空宅妖怪語
十九　民部大輔頼清婢女逢妖怪語
二十　西京人見應天門上光物語

○怪異傳

一 鬼現油瓶形殺人語

今はむかし、小野宮大臣藤原實資といふ人、内よりまゐりて出でたまふに、大なる瓶の、小さき油瓶ばかりなる、ゆさゆさとゆるぎ来たりて、これいとのくるしげなるを、わがぎ、けるふたをよりて西ざまにまゐる人の門の閉ぢたるを、あらくあけて油瓶の穴のあるをうちくくめてうちくくめて、おしてゆるぎ、ゆるぎて、穴より入るとて、大臣

かく月毎に帰りまいる後、ひとりぐらす家に
行く。何事かあり閑てうたてそばいされしうば
使ひ召れくうり来くいとくの家よりつれもてあ
作事をぶ。日ごろまづいてぶ書うせ作ありいも
きび。大長方はる油瓶い物氣うて方ーぶ。猛乃完
より入くぶ。ちんーまるちりーぶ我ぶ歩ぶーまる。他乃
用まは月てぶりうれしども。大長ぶりうていそれと見まい
ぶんいぶ。ぶんよいわをぶりとうまんぶりうれく
ぶりうれちり

二　近江國女生靈来家害人話

今いむかし。京より尾張へくだる下臈あり。長崎筑
前へ越て居ける。男よもすがらくぶ。ぶ。男尾張のくぶ
なくぶ。ぶりうれをうぶ人ぶ。早るいでぶ。
けうぶ民部大夫基ぶ人乃家い。ぶりうれ入くて
い。男その家い。見より七八所あり。格子ぶ入れ行
ぶりとうぶ。ぶいぶ。ぶ見てぶのぶうば。
男見ぶ。ぶ紙ぶ。ぶ家ぶゆくぶ。見
ぶぶ人乃家ぶれぶ。ぶぶぶ。ぶぶ

ふなばたにおりうけをうつくしきをうつくしきをうつくしき

おしてまゐりたりて殺しつるとあん侍ぶらうべ

三　河原院化物殺女語

今はむかしの事なり栄爵尋ねがたくとりて世に
のりうる人あり妻もよりてつねぞなれば家を
ひんとてまゐる異りてよりうるぶ宿百遠くあるりなれ
ば河原院のうちに住人なりしに其家の者ども
うりて幕引まわりて宿りうり夕暮方よりなべ居
りもらしとられうるの妻戸を内よりわしりて
妻戸をそこに入りまゐりてどうんとたれども
うれんぶに入りぬ後戸を閉うる紙をわきんとすると

ひきたに男近くあるうれ人の家より行てぞうくれ妻
あり戸をあけてうべくいへば粉ひ人あり来ぬ錦とも
いくこ戸を切ひきぬ少紙こげて見るふの妻おもも
痴りあくたるる紙。梅ぞうらあて面ぞう。陸く骨
どうう強く閉いおしたるるうり。鬼の吸殺しうる
あるうと。人を云合うる妻紙うしたるいくぞの男も
行をくぞ行のぞ聞へあげうるしやきんぞうるとはうく
ぞうるなり

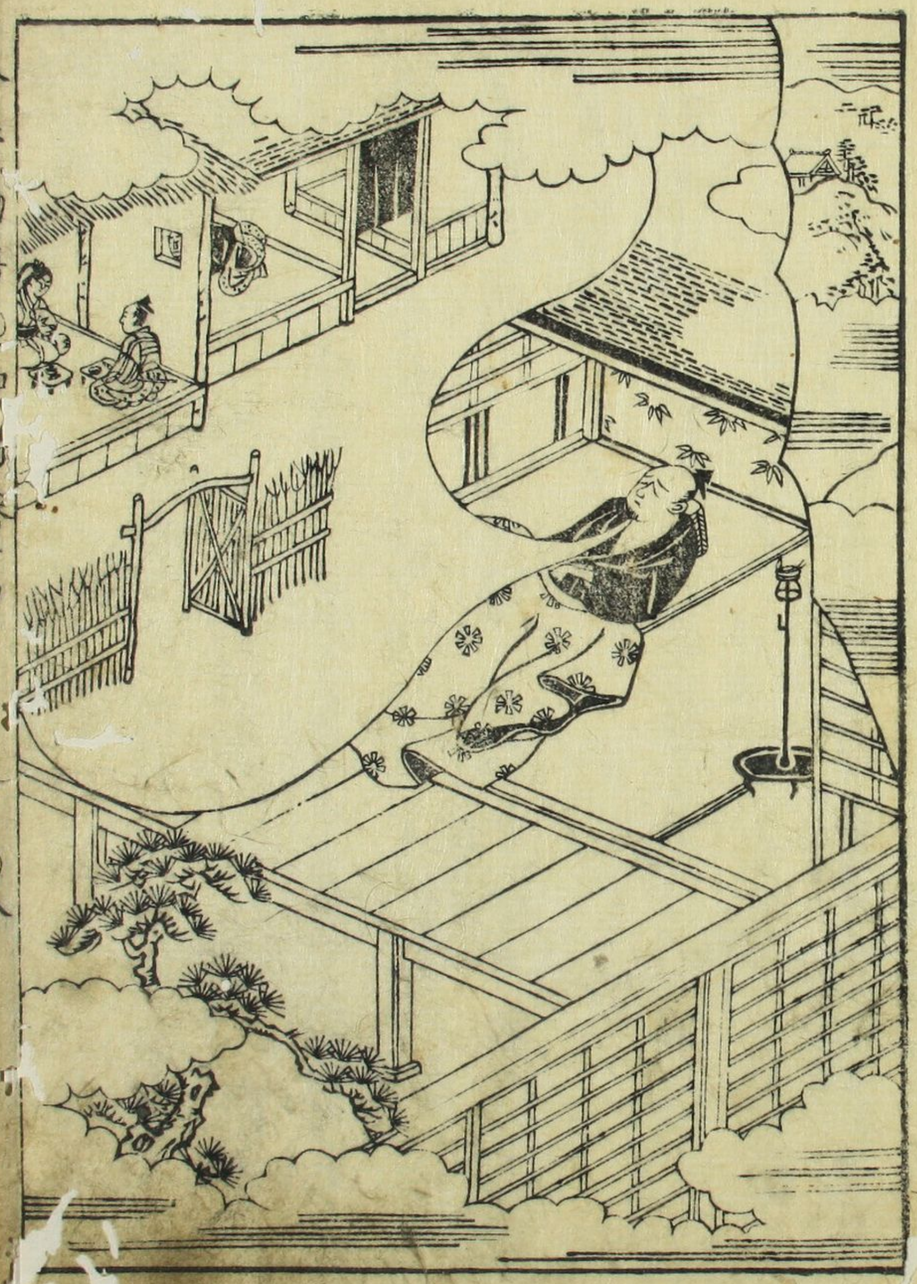
四　鬼現殺人語

今はむかしの成人乃汗よりつる侍武人宵ぞうるに

南面の弱かはの方に宿直と武人ども二人伝聞ありけり。
ちうたかと寄くて不寝して物語どもしをりけるに、その
家に不得ぬ。長侍の乃法師紙に、五位などして有
ける。上宿直に出はらひひとり聞てゐたるに、夜
乃はしそめさうえぐてよ。弱あるは武人の
侍ひ。ふてばして居たるに、夜深くなる程に、東乃
妻の棟のよりよ。俄に板のさし出たるを見れば、武人れ去
ぬ。ものの来るれくて、角に、ひ板七八人出たと
見てしかひくくに成ぬ。二人の侍ひ、ものいはゆく。二人乃
侍ひ、さて、い見るやもの物語をして居たれば。

迫くい寄くて、篇子の迫乃かしわるあるに、ひ板こを
くくとひぬぬれて出居たる方に行ぬる五位侍ひ物りれ
されるあれ。二人なるあれ行くをもをけるに、二人の
侍ひ、ぐるさけつて、人を出こて、ものくれ来。あり
けるを、ぐれば、人くに、ぐく。出紙にぐて寄くるる
る。其五位侍ひ、来年めしいまどて、板あへ出た
見てれば、門あもちるるるぐしをるへば男てん
るのいたるるる紙ば所よ異とべきものなるぞ。
いいめるるるんるるけるるる也

五　迫江岡雉魚鷹戦話



今昔、近江国志賀郡。倭名類聚鈔作二伍貝一 石市郷の東南に
伍貝瀬といふ所の南の方に勢多河あり。その河
の源に大海の鰐上りて、この鯉を食ふなり。鰐員を
うりて、この宵国に行きて居たり。鯉い勝く
後ぞ上りて、仲生鴻伝めぐりて、今にあり。
つ。伍貝の瀬といふ。勢多河。字滅ス 瀬なりとぞ。語
はべりとなむ。

六 常澄安永、於不破関、夢妻語

といふ。常澄安永 常澄姓未考 といふ者あり。もと紀い
惟孝親王 孝當作喬 の下家司なり。其官の封戸を徴

むがために、上野国に行きて、美濃国不破
関に宿して寝たりしに、其夜の夢に、京のうちに
火出で焼けて、男女あり。子共とともに、一人は童女
を具して、逃げ出でぬ。遂に、紀の子共、妻ばかりぞ
残りぬ。常澄、関に入りて、安永が壁の穴より覗くに、
見れば、此の妻、我が妻にて、居たり。湯殿にて、飯
を炊ぐ。常澄、小食して、行きて、寝ぬ。安永、大いに驚
きぬ。扱い、我が妻、紀の子共、ぐぐ上りゆきぬ。
常澄、紀の子共、ぐぐ上りゆきぬ。
うち、市に入りぬ。さて、美濃に、美濃

世もいとをぢ〻をしいとなるを見てやがて出でつゝ
とゝの所にうゑぬ。我羽わきばいとをぢをして夜昼日あた
ぐて京に帰りて家に行きて妻を養ひけり。
安永紙にかくぞ。
のあるも知る者なりて我といざなひ行きぬ。家
りゆきぬ。我ぬかぐて内に入飯を炊くに
らいて二人所にしてこのわらふ者しりぬ。
我もはぐくそこにて養ひぬ。
べ。かく帰れ。
ちうくの長紙にそ。

本にとうとうしぬ。妻も国にておやくとひとり。妻
かく同時に。同夢をみる。希有の事なりとぞ。
うとうはうとうとうとうとうとも也

七　紀遠助値女霊被殺語

今はむかし。長門前司藤原孝範下総守貞孝二男下総長門権守也
つの国下総守にて。河内国の人。法師
津守荘と称する所に。紀遠助助当作輔。
系図口遠輔右兵衛尉清輔男
乃ち宿直にて上をそ。宿直にうとうとうとう
きてはうとうとう。法師ぐるぐるとて。

一人の女裾をとりしが遠慮なくいづらへおいす
人ぐと問へば天竺へゆくと答へ女さまの行べき報
をうすべき事あり問へば女房なんとらいくと遠慮何
とてもさらばく給ぐ帰りさんといつて女うち給しを
のこりいろとて懐より小さき箱紙給ふとはくこころと
出して方縣郡唐郷（按和名鈔唐郷當作大唐郷）乃柳のりんゆき
給ぐ柳乃面のけらよ女房はくさんよ淡しまへといつて
を助給ふ事とうて其柳のもとに女房と
ば作と尋ねべとやらくべ柳乃もとに居るべ
其女房うけとられまるべ其のこれよ淡しまへ別れと

はまれあまくうたてあまくたりはは女がかくらと声も。
をを柳が耳見ゆるかの人のくに家へいあくく紛ぐりる。
そのくらをを馬よ乗くく行よ乗屋よ乗けまども。
は柳乃もと紙乃とれて箱紙どぐ乗とりけまべ乃ぐて
おりてくぎんくて壺屋をてう面の物乃とてさげ
ゑ乗てう遠慮が妻い嬢姫とれいどきものれば。
は乗紙乃とて乗ていたくを柳が女よ得さんくて乗ろ
乃ぐて買まくぷまたくくを乗ふくれくて乗を柳
が出てる問ゆ名とくきくくれば人乃眼精と男根
をを多くくて。妻大よ乗ぐろくを乗ぷを柳が帰ろと行て

人をけまじきものを知てこれいかゝくゝ人間でき物をゝ不仕ゝ
つゞゝゝつるゝて蓋紙ゝ書ゝいてゝゝのゝゝに結ゝくゝうの女
乃行ゝゝ格のゝゝふ好行ゝ多ゝゝうべ業のごゝく女房
本ゝしみ。紙紙ゝゝて。ぬゝいゝい事とうゝゝんべ女房紙
と受ゝうゝて。此紙いあゝくゝくゝゝきにゝゝうゝいゝふゝきゝ
けゝゝゝゝ乃ゝゝ事作ゝどゝしゝゝゝゝ。女房の乳通ゝで
ゝゝゝゝて。ゝゝゝゝくゝゝゝふゝれゝいゝゝくゝ失ゝゝゝゝ
家ゝゝ帰ゝゝて。ゝゝ倒ゝゝゝゝずゝゝ打ゝゝゝゝゝ。妻ゝゝ
向ゝゝゝゝゝ

なく云てゐたりけるに、男、妻、病の付て、
てうまに成て、ものもくはでなりぬれば、
なりもしうばかりなる事をそぐ〳〵
て、侍とれば、わきばに寄りて、
とりいろの紙よりもくろき妻に成て、
ぐ〳〵ばかりて、ものもくはんとしらいくよりやわらかに成て、後
の妻といふ家よりてぞ、その男、糟糠の妻にくまれ、
ぐりに行て、家の門いとこはしくて、這入ぬべきふまりしふ
かくして家もあやまちあれて、人住まぬ気色にて、
人なりふいとく物のあれば、ものなどもなりきりなりぬ、

九月中の十日ばかりに、あく風ふきて、
き雨ふりぬ。家の内に入ぬれば、常に居たる妻
ひとり居たる。人々、妻男、ものもいはず、
ちくぶ、ぬげてぞ、はかなくはるばるとよりて
まひぬるぞ、といへば、男、四五日、
いていぬ。いかにてもしばし、ものもいはず、
しるとよりなん、後、出たるに、
さんとて、まうけるまうとこしらへば、妻、よろこびて、年ごろ、
物語ども、ものもいはず、
ばかりに、男、妻、なほ人いたりて、問ひ、女、

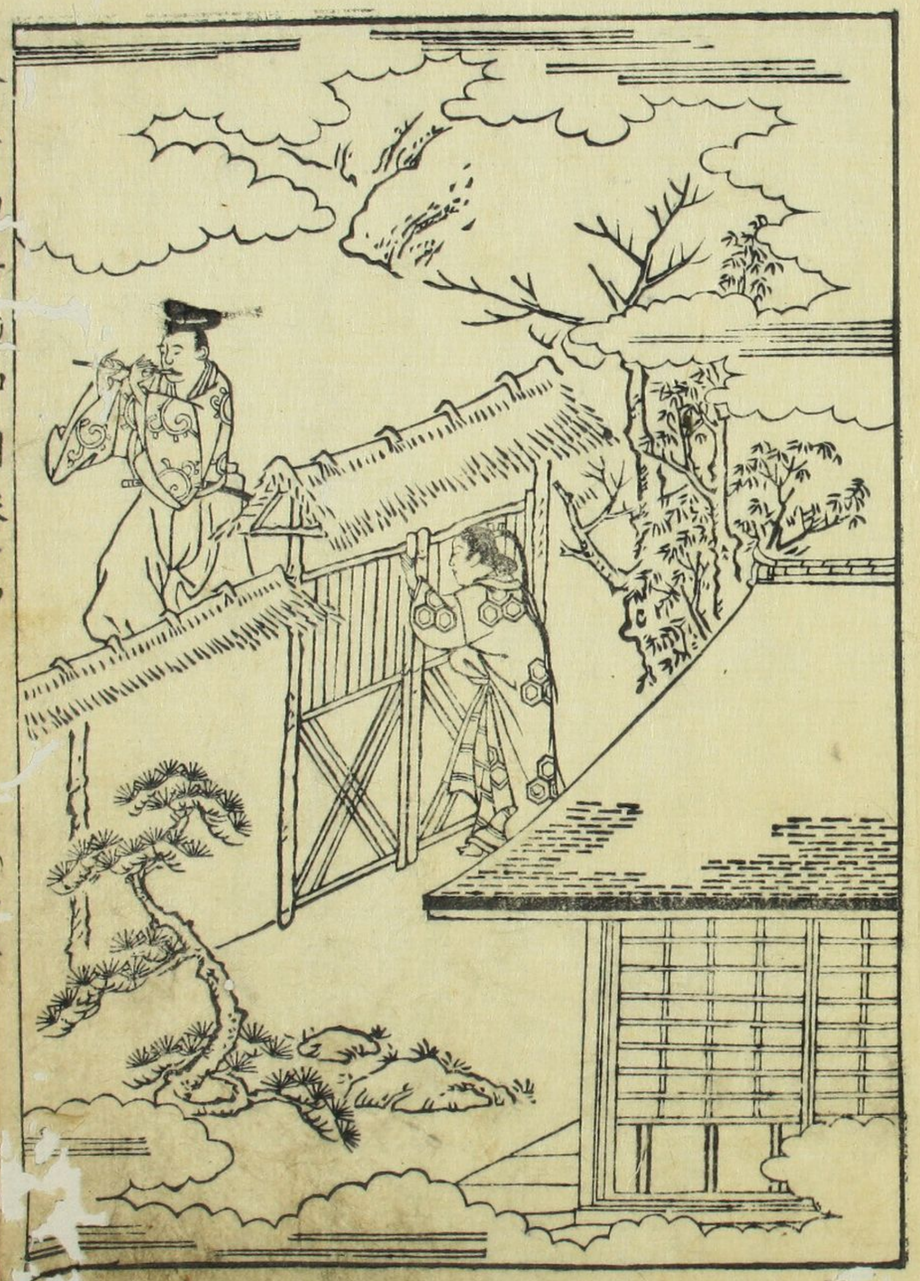
うちとけはきいけうつくしき者をのこと言てぞ[illegible]
まのこの紙絹取てうち投よ。暁よりてぞもに寝入て間
もなく男の目のさめて人のうち男ぞうもて妻の人
をよ。枯くやうにうち泣人なりぞこいつかわるうしけれど。
紀ちつくわざうち下く。髪目うとしたうでいかれた死
人なり。其時よ水干袴と着て簾の中家に行ぬ今
けぶつく尋ぬるにつくぶ簾の人いでぬ。
人いなくなと問ぞれば。其人い年比の男れ去て来ぬ
うてうしとていつくうぶげさ行ぬ。病つきてあり
ぞれぞぶぞ人のきてぶ死骸とぞ

拾ぬるこのこをけきぶいまぞ有りこいひうぶ男つよ
くわかれてあげ帰ぬ。実になふ物ぞうるを
なんぞ年比のどしよりぶて視のぞ使りて至ぬ
まぬぞおぞれなる事なるこのうち作てうち也

九　広夫来値妻語

今いむぞ大和国よ住人むぞうひうる有。のうち広
つく広ぬうぞうぞれぞ毎ぞれをのづぞうぞ
河内ぞうぞ住人あり。一人の男るあり。年ぞくのうち
うぞうぞうぞれぞ。至ぞうて宮仕と。命ぞよく吹
ぞうぞ男ぞ大和ぞ人の姫ぞうち有拾英廉人

をみて消息をはうして今はは
同入さうけるぞ。おきうにいとしんべつ毎ゆるして今也
ゑうぞうにうぎうなく好びて。三年ばかり住居よ。
却もしうけども男。病をうしなをて煩ゑうぞ。女ちうを
はくて療養させんれども。ぼめようのつぐ先ゑうぞ。
女うしをうれうそ。ゑうぞよしいうぞ。三年といふ秋。女
はのようも弱くとひ出うてゑうぞ多くてぞぐしてし
法ゑうぞうふぞ。ゑまだうに命ぞ。ゑうぞをうをゑ
うれぐぞ。ゑうれもうみ人よみるうのうれとぞうくあ
うをうにうひうゑ。消くちうく。ゑうぞ。女の居うけう



鄙のりくに寄まくぞ寄あけてこの聲もこのごとし
ぬまをしべあやまくはくしをれはわるくて蔀れたるごとし
つしのぞたくしべ男のり姿をえてぞくくつ
をぞおもふ歌ふ人のくるれさいをひさんまあくるかくり
ゆいていてくるしぐ身よりう煙のくらくしべかわるとしく
くる物もいくぐしぐばぬ男をてうりぞくくるをあ
あくしをんぞ白紙よりてまうまくるんぬくわぐるんべ
まくるまうちんぬ日丑三度もゆる苦紙うくるまり
くいいてぞうれ消ゆくれんをんくりくをぞ語つくく
くくちり

十　鎮西人至二度羅漢語

今はむかし鎮西の方に行くる人高乃くるに粮人船一艘よ
くくいぬ行ぬよ行て南国よ帰くるに船の書中ぬ方ぬ
あくんぞくくの瀾くく大なる物あくぞ人くくある待ぞし
べぞ船中ぬ者ども出くく漕よせくく人倉物のいくくみくん
くくて船をよせくく物くよくくるふぞくくの人の来
ふ者くくあゆくくくしそく人船よ来くくくれをくくに。
人のくくくより男ども乗の烏帽子に白れ水干袴をくる
ぐ百餘人ぐくる出来くり船乃来くくも心奴ぐくくくる
くくれくくんくくて船乃くくくく

ちう弓を持ち、射中れる者いふ○てよりぬ。弓矢を杖と思
へれば、弓に矢をたがひて、何者ともの遠くに来るを、
近くよりて射んとて、ばかりを射るとも、たがはじとぞ。
これいかでかやうにかんまづ〳〵かりて帰入りぬる。
和尚の者いかにかれをれて、溝のごとく帰りぬ。
後に事を人に問へば、年老いたる老いたる法師
度々語りて、あやしがりて、和尚の人を合せるなり。
り業用ちうびして、ものを作りゆきて、集りて来て報
してこれを聞くに、人の中にてこれを
毒人に仰せられけれども、蔵の人
といひてぞ、ちうびてぞ、ちうびてあげられば
こそ命もわれ、遠きるば百千の弓矢ありも、彼ふ
ものとつて、我をば、これいどてこそ、さ
かりけるに、事の結ぶ乃人、弟にのがりてこそ語
ける紙、関つぐそうり結ぶこそ也

十一　播磨国鬼来人家被射語

今は昔、播磨国に行きける人の家に、夜中ばかり
に鬼来るぞと言へば、陰陽師を呼びて、祈るに、何の日
来るぞと問へば、門に来るぞと、物の

れとそそくしが本とかふさぐべきこいてなすよ。物の間よりのぞけば。蓋摺の水干
袴をそなへる男。笠紙頭よりをそ門のまへよりぞ。法湯師
うしで鬼をれとこいべ。家内の者わそれ迷てるのごとく
れ。此化物いづくと尋ても見えず。家内うつく
竈の前よりこそ。家をこれをみくぬまぎれてころ
さんとす。一家射くるをんとこしらく物ぐげうの大の
形俵をもちてづのそぢ。めてそこのくい。鬼が隙板
よりうしろ。そこびてそ井ぐらうれ。鬼い射まて
うさ消のうの共ぞりぬ。家内別事

となりうしとそんぬ。ぬうはそそそうそ地

十二　近江国栗本郡大柿語

今いむ。近江国栗本郡。大なる柿樹あり。其圍
五百尋ばかり。木ぬ高さ枝のさびこれるかちしゆ。
そのうげ卵よい丹波国紙井ちひ。名は伊勢国紙
井ちひ。霹靂ふてうごうず。大風ぬも吹ぬ。ちる
間其国の志賀（二作滋賀）栗本甲賀之郡の百姓。この
木の陰井ちひく用ふてうごうゆへ。田畠紙ぬ得
る事ぬ。これよりつく其郡ぬ百姓名。天皇よ
り中紙奏ぬ。天皇則掃守宿禰名をぬ

百姓ども、はたのもとづくして、はた樹を伐らんとすれば、ことごとく本を伐て、百姓田畠作るふ豊饒たりしに、俄に衰へ、彼衰へる百姓ども、ひとしく新大なる木あるを、是幸有の事也と、なんぞ、伐えらるべきや

十三　白井君銀提入井被取語

今は昔、白井君と云僧、けだしい高野東洞院に住しが、後は鳥丸より東、六角より北、烏丸面、六角堂のもとに住す。甚房より井を据て、銀の銚を据物とす。白井君よろこびて、別の銀とらんとて、小さき提をもて持て、ちらに此僧の軽き者、後は寺藤息良貞と云者のもとへ、銀提と井輪とをもて、水を汲て、取てゐて提を井へ入れ、白井君、是を見て、人をよびて、君、是見れ、人をよびて、井へ入れ、是するゆゑ、もしこれ、ちづくりてやとて、人と集りて、水を汲かせ、銚のもれ、是のぞきて、人をよびきいて、そもそもとて、きたりとかけつくるもの也

十四　道衛舎人、常陸国住、奇異人語

今はいとゝ。遊傍今人あり。奇紙よくさゝいうゝ。
相撲使して来ぬるとぐらうゝ。陸奥より常陸へ越
ふと紙。燒山関として深さ五尺ばかり。はと紙通ふとて。
馬眠をしてさびゝうまけまこび。泥障を拭ふにうして。
常陸奇を二三遍ゝ。ひゝるゝ。深山乃奥より。
ゝげちる数して。あふれりゝ。いゝく。紙をゝ
うちけまこび。此男れどゝ。馬紙引どゝ。是い推
いいつるぞと。後去どゝに尋れども。ゝぞゝいつるこゞ
ときうずやいひうれば。舟のもとゝして出をゝ
ゞうゝいうゝ。ゝくて宿よりゝ。ゝくはゝらあゝくゝ。

うの夜宿して寝ゝ。ゝうゝ。常陸奇紙甚国にて
うゝいゝうべ。国乃神のゝぞゝ。ゝくゝ。ゝくゝ
ゝをゝ。ゝうはゝゝゝゝゝゝゝ也

十五　於京極殿内詠古奇奇話

今はいとゝ。上東門院藤原道長女　京極殿より住ゝいるゝ。
三月廿日あまり。南面乃桜ゝ。ゝれゝ。
院い寝殿ゝれゝ。ゝけるゝ。南面の日隠乃間の
ゝぞゝ。氣貴く神ゝびゝる。ゝ。こゞ。ゝくゝ
ゝをゝ。ゝゝれ　ゝゝゝゝゝ。院ゝゝ。ゝ
人のゝゝゝゝゝゝゝ

うば。御簾の内より御覧ずるに。八の君をば。さらに。けさびめるさまの人を。えてぞせさせまゐらせに。近く。遠くて。人作りどもの。ひく。黒木ちごのいろいろ。幸ひ。おくれさせまゐらせ。物の霊。なごんくやうをぞ。行ひてぞ。

十六　雅通中将家在同形乳母二人語

今は。むかし。源雅通中将（内大臣雅定男）。乃家は。四條よりは南。室町より西也。まうぢより中将。兒二歳ばかりなる。乳母いづれも。南面なる。西の方に居たるに。兒のおきてゐるを。乳母のまゐる。をとこけさびて。中将北面より居まゐ

ちからを尽して力を抜くまでなりけるを
同殿の乳母二人ゐて此兒をとりてたかのを足を
とりていさかりけり。中将あまりにくしとおもひて二人
をもとれば形をあらためいづくにかをこの乳母をとりて
をちびぬ。定めてあくまで孤をぐしたる法力拙
なりけるとぞ。一人の乳母いうさ清水の法
ちう。中将乳母よりいかりけるとぞ問ひける。乳
母いとく若君とわたべうまうけるぞ。奥の方より
知る女房のおとりに来ぬ。是い我をなりとしてそう
ぞんしたるとぞ。べうづれどと引ちらしたる飯の

おとりにて力と抜くまでをひらをひろげよりの
女房の君とをりて奥へ入るをはるをいひろ人で
あれるあるは幼き兒どの紙びあそびを引きき事
ちりとをんぞうり他人をとり也

十七　教業退鬼語

人ゐに音。あり人方遠よ。下京辺よ幼兒を具して行
ゐり。其家に夏あり。と彼人いたりざるとり。幼兒の
泣ゐとおとりぬ紙ちくをかけて兒に乳とて
ぐゐり寝ゐり。乳母い同紙さ掛て兒に乳とて
あくゐるゐ。新まぐゐに塗籠ゐ戸を細目ゐ

あきらく。長五すぐろうの男れ髪束ねうるぶ。馬よりまて十人ぐらう。花のわらうの紙にうるしい。乳母わらわとこしのぶ。おまえの果とはんで投げうけるんこの口うる者ども。きんとと散くうせうぶらまえの果でんに血ぬきうう。物されさ兒どものあうれいうからど打まえと為てくちりとうん紙ぬくうる也

六　堀河空宅妖怪語

今いしゆう。宰相こ云清行　姓氏録曰三善宿祢百濟國造右大王之後也云

人あり。まのうと和くぬ陰湯の方ともきいうう。ちうう五條堀河乃毛てよ。荒うう舊家あり。けりさ

事ありとそ人とあずして久くちうう紙。清行家たううとそれば買ふく移りとうにあるえ奥乃方紙見うう。詳くいまうび清氣なう女居うう。麝香乃ふいえれどあうべし。赤色の扇をけうしうよりいえ額つき白し。歌の捨てうう。眼尻長くいうう。尻目ふ見やうるうづくく氣貴。あうもせど寄りあうれば居ううあて扇紙去うれだ。口耳ひきまできれて。立すぐうの銀のごくなる牙くいちぐいう。あやうき老うれと見る程よ。塗竜うう入く扇紙閉わ。宰相これまさぐずしてあうる。

中納の月きいろくあらたなる本時さ丈より淡黄上下
ぬきてうる翁は文排よ文をはりて国の主にさぶいろみ
て格のすゝふ寄来るくぴいぶ陸づきて居こうそのこれよ
宰相殿とあげて何事とおぼしてあれば翁おいがれて
ゆきさ殿うてとさく年来住作る所ぬく居しめ給
へば大なる歌くらいくぬ給へとさんさうよ来くいて
そのこれ宰相のいくくぬ海づうきへ断不當なり甚殿い
人乃家公領どう事へ法第よ作くく得る事なり
海人のはうくく長べさ所人とおぼうてとなし
うどぬおりて領どるい非道なりすぐく悪神とう云い

道理を知くぬ海づうざる也海いうおりず天乃責紙ぬう
ゆるべしぬおりよ老狐なりど物一つぶにぬくべ結咋こう
さんすのなり甚道角うんとせてあしうべぬ家所翁
とさく作ぬうものぶれあるしぬ角しうう行つきて
作所ぬれば甚角紙となりぬ人をおぼうう作ぬ翁
ぶ所ぬるいぬどぬくうふうう作小寺紙乃制止とう
てうんべてぬのぶうくくぬ作る事とやいうんぬくいかく
うぬをばいてう作るべさ所よいまうるべさ所作い
れば大学の南乃門の東乃まれぬべてぶうう地作
と作ゆうくしをかくふうぬ海うけうんいでとう。

宰相いとをしがりて、いきいろくなりぬれば、一領引
つまくりてとりかくしてかへりぬ。義孝ども四五人乃殿
うへ、あつまりあそびたるに、宰相の御ぬけ者どもを
ひとしなりければ、宰相あるうちにそのちかくと
ひたりをて、年久しく住たれども、かくてあるまじき事か
うるとて、智ある人のもとにまうでぬ。男もあるべきなり得
ざりけりと、清行ぬれば、宰相感じてなんぞうち
けるとぞ

十九　民部大輔頼清婢女逢妖怪語

今はむかし、民部大輔頼清といふ者、院の勅使と

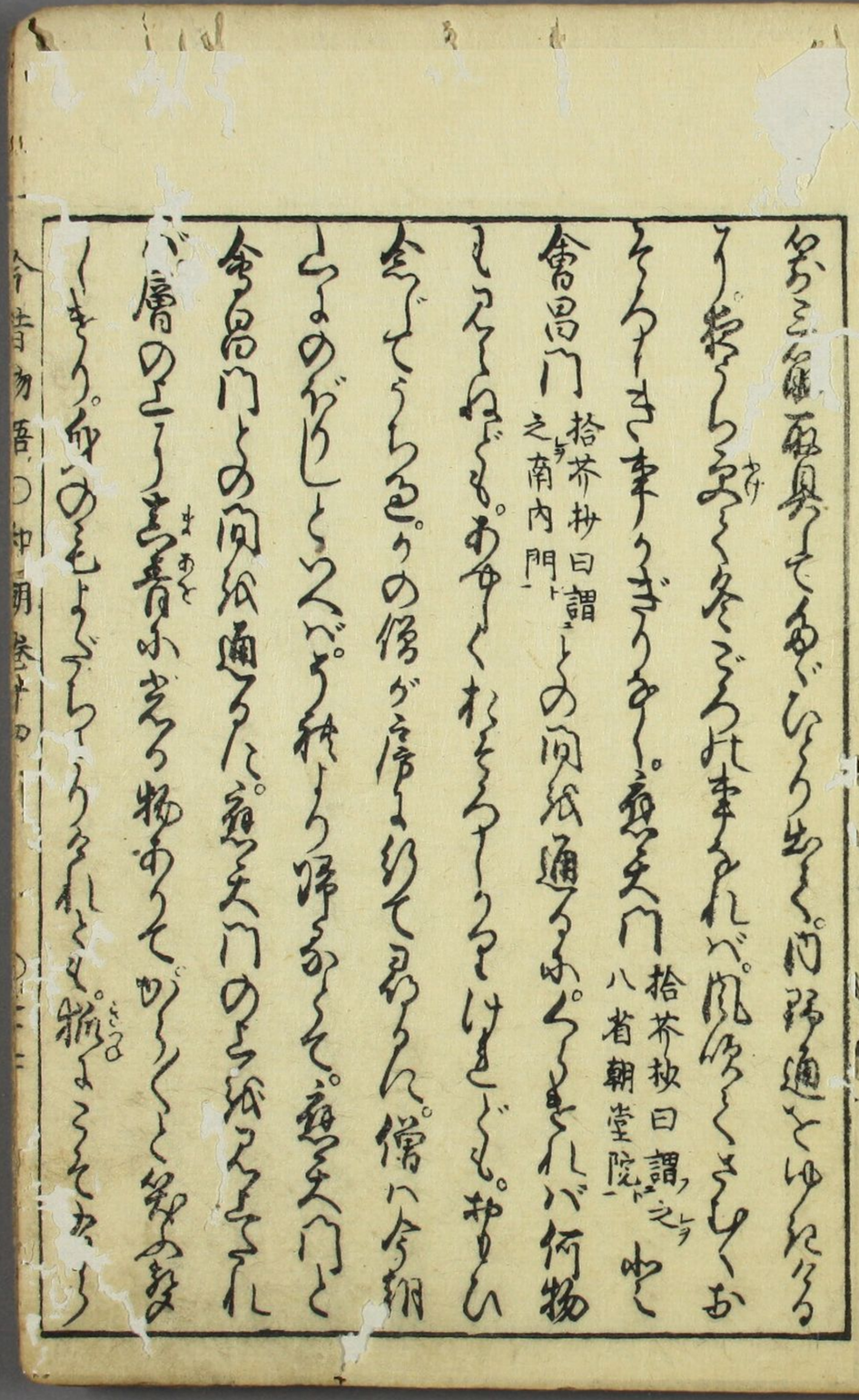
ありて、本幡の西頭より行て方ける。頼清がつかひける女
あり。参河守行といふ。年ごろはひとりぐらしの頼清
勅使として本幡に居ぬれば、女いとこころのうちに
けるに、頼清が行より舎人男共遣して、本幡とぶらはせ
つかはしたれども、人乃家とうて居たりと。
疾くまかりとまれとぞいひけれども、女あんずらるること
いとをしくおもひつつ、そこそこにれば、頼清が妻ぞ
よりはしたなくて、ものくちばしをしてけり。物語りなど
すれども、なほをしてをりて、四五日あり、頼清が妻
いとくるしきことよい、雑色一人を遣はして、要事あるべし

すんやうこ女ありけるといひくるを紙に同僚よりあづけきて
ゐてくるなり。あはれよりてゐてくる家内に入れしかば。新清が
妻。その子いづまて童子ゐてくるあざけりてさ聲をあげて
ゐたりけるを人をてさびしうんとさいひてそこにて
乃妻同僚ぞくあれば。ちばしあるそれて物をいひてぞ
つとなりぬ。あのくいてくあるべし參河守仲の君の
ゐるいそぐ久しくまうこ侍へざりし。殿い院の御前ゆ
ふされまいされば。若き人ゆりしに二三月い殿てて
出まいてく。藤の人のいるして。使ひてまうしい
ばこうゆまりやなどうまうあ。女あやまくゆきまうして

有のまくにまうくとかくれば。紙なでも家内のこの
ゐまうれあふこうぞ。女い我をとをくまうあと
ば今いなれ者とこうなり。人をゐてうまうせう人
といへば。女人をつきそゐたりてありつる
西紙にれば。家とくいまくてゐるぞとある弥よ者
うくまうり。胸ふさがりて紙ゐうふとあるひう
荻落のちぎりうあれて居くるさ居られば母うう
うびくこれいでたるく。本情よりてきうくあり
いつぞうう者ふ。あやまうこ本なりうあうと
ゐたりけるなり也

二十 西京人見應天門、亡失物語

今は昔、西京に住める人ありけり。父は失せにたる母の
こめり。男子二人ありけり。兄は侍にて仕へけり。弟は比叡
山の僧なりけり。母病みて、日比煩ひけれども、
二人ありける兄の家にてつきづきしく療じける。母は
し驗氣よりさきにはべる。弟の僧、三条京極なる師
のもとに行きて、病たち給はりて、乞ひ求めて
きたれば、弟の僧よりまづ母に我れ乞ひ取りて乞
ひ取りて、僧紙にて乞ひ取りて、母にもとゆく。兄もまづ
まづ呼ばるんとて、母をば人よりまづまづ



乞ひ取りて、乞ひ出でて門に立ちて通さじとゆるさざる
ほどに、兄は乞ひ取りて、乞ひ出でて、門に立ちて通さじとおも
へども、弟の僧、乞ひ取りて、乞ひ出でて、門に立ちて通さじとおも
へども

かとこらのく。西の方にゆくよ。豊樂院の小門より
る光あらて。男ゞ前ゝ。ころびまろとて。笑をとれち
ゝけるふ。射ゝ紙すゝ。ひとくれしぐも。いづちゆくゝ先ゝ
きり。かくて西の京はけあるよ。あまゝ。ゝ。ゝ。